平成２８年度日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立駒王中学校　教諭　橋本　朋美

１　派遣期日　　平成２８年９月２４日（土）～　９月２５日（日）
２　研 修 先　　会場名　北海道教育大学　札幌校
　　所在地　北海道札幌市北区あいの里５条３丁目
　　http://www.hokkyodai.ac.jp/sap/
３　研修内容
（１）はじめに
　個人研究テーマとして「絵画作品における作品鑑賞能力向上のための指導法の工夫」に取り組んでいる。それは、表現の分野に比べ鑑賞の分野の研究が不十分であると感じているためである。そこで、今回の学会では鑑賞教育に関わる発表を中心に選択し、実践内容を聞く機会をもつことができた。また、題材設定について悩みが晴れる発表を聞くことができた。そこで、題材設定から１点、鑑賞教育から３点の研究を紹介する。

（２）実践事例
ア　題材設定
図画工作科における題材開発・題材設定に関する考察（筑波大学附属小学校、武蔵野市立桜野小学校、武蔵野市立本宿小学校　井ノ口和子先生）
　題材つくりには、①子どもの実態を捉えること、②経験にある子どもの活動をイメージし想像すること、③見通しをもちながら題材の広がりや手立てを考えることが必要である。しかし、仕事が多忙な現状から、実際に子どもの実態や活動をイメージし、題材の広がりや手立てを考えている題材つくりはそう多くはないのが現状である。
　井ノ口先生は、題材設定に子どもの姿が見えてこない現状を示唆しており、作品ありきの題材設定を問題視している。これは教科書の図版からも読み取ることができる。子どもの活動風景の写真より作品の写真が多く使用されていることから、作品像はイメージできてもどのような力を身につけさせたいかという本来の目標を見失っていることが窺える。「題材を通してどのような力を身につけさせたいか」を強く意識し、題材設定の折には、子どもが働かせる力をイメージしながら研究する必要がある。どのような力を身につけさせたいか目的がはっきりしていれば、おのずと評価基準も決定でき、教師の好みに偏るような評価は行われない。

イ　鑑賞教育
①　感じて、考える鑑賞の学習―美術館との連携（札幌市立円山小学校　菊地惟史先生）
　円山小学校は札幌市中央区に位置し、北海道立近代美術館が徒歩圏内にあることから、２年ほど前から小学校と美術館との連携授業に取り組んでいる。所蔵作品の図版データの提供や見学前の出前授業、低学年の児童が気兼ねなく鑑賞できるよう閉館日での見学など、多くの面で連携が見られる。
　美術館との連携を図る上で、生活科で美術館の利用について触れ、鑑賞の約束や決まりを学ばせる。次に図画工作科へと繋ぎ、鑑賞に触れさせた上で美術館へ出かけるという流れを組んでいた。鑑賞では、２年生で国松登『星月夜』という大きな黒い象と白い象の２枚の絵画を鑑賞させた。プロジェクターに投影された大きな象に近づいたり、自身の体を重ねてみたりと全身で鑑賞

ができた。作品の中に入り込んでいるような感覚で鑑賞できる環境が魅力的であった。また、３年生では抽象絵画の鑑賞にも挑戦していた。「〇〇な気持ち」という言葉を使用し、どんな気持ちで描かれたかを考察していた。学習指導要領と比べると高度なことを行っている部分もあり、発達段階に応じた鑑賞教育のあり方を考えさせられた。

②　日本美術に関する鑑賞と表現の教育実践研究―保育士及び幼稚園・小学校教員養成課程の大学生実態調査と実践事例を通して―（浜松学院大学　筧有子先生）

学習指導要領でも日本画や日本美術への取組を促しているが、保育士及び幼稚園・小学校教員養成課程の教育に携わっている筧先生は、題材及び素材研究が十分に行われているとは言い難いと感じている。そこで大学生へのアンケートを通し、現在の日本美術に関する意識調査を行った。上位１０～２０％の学生は、社会科と関連する日本美術の知識をもっている。中間層以下は、日本美術の概念に工芸・日本文化・文学・民芸が混在している状態であった。また、美術の授業で使用した画材を訊いた質問では、墨は４割使われていたのに対し、岩絵の具等日本画の画材が極端に少ない割合を示していた。そこで、大学の講義で伊藤若冲『鳥獣花木図屏風』などの日本画の鑑賞を行い、墨でにじみやかすれを生かした絵巻物の制作を行った。すると、日本美術を将来、教育活動に取り入れたいかという質問に対し、９割が取り入れたいと解答する結果となった。これは、日本美術に関する講義を行う前の同質問の返答より、そう思う学生が増えていることを表していた。

将来、教育現場で授業を行っていく学生が、日本美術に対し知識がないため嫌煙するというのは非常にもったいないと感じる。本校でも、毎年日本美術に触れられるような題材を用意し、少しでも生徒の日本美術に対する苦手意識を無くしていきたい。

③　作品の情趣と鑑賞法の違いがもたらす主題感受のあり方―中学３年生におけるミレー作『種をまく人』とゴッホ作『種をまく人』の比較鑑賞を通して―（宮城教育大学　立原慶一先生）

ミレーとゴッホの『種をまく人』は非常によく似た構図ながら、受ける印象が全く異なる。立原先生は本研究で、ミレー作を単独で鑑賞した場合と、ゴッホ作との比較鑑賞した場合での感じ方の違いを述べている。ミレー作は「臨場感」「力動感」「暗い感じ」などが直感的に把握できる。このことから、単独で鑑賞した場合、多くの生徒にとって価値感情的にマイナス的に受け入れられ、全体的に暗めな、ぼやけた、地味な雰囲気などと感じてしまう。反対に、ゴッホ作は明るい色使いから「明るい」「朗らか」といったプラスの印象を受ける。面白い結果として、比較鑑賞した場合はミレー作に対しプラスの印象の言葉が多く出ていたが、単独鑑賞にした場合プラスの言葉が激減してしまった。今回の作品については比較鑑賞が望ましいといえる。

鑑賞では、作品を単独で見せるか比較して見せるかは教師の意図次第である。この研究では、比較することでより広い視野をもち、豊かな言葉が出てきた結果が得られている。今後、鑑賞を行う際には、安易に単独で見せるのではなく、どうすれば作品が一番生徒の心に響くか考え授業を組立てたい。

４　感想

今回の大学美術教育学会では、大学で先進的な研究を進める教授の話だけでなく、現場で日々、子どもと関わりながら研究を進める教員の話も聞くことができた。どのような力を身につけさせたいかを念頭に置き、常に題材を揉んでいく必要がある。また、鑑賞の授業では美術館との連携した取組・日本美術に対する取組・比較鑑賞における取組に触れた。どれも、これから鑑賞教育を行っていく上ですぐ実践してみたい事例であり、現場の生徒へ還元していきたい。